

## はじめに

学生の皆さんは、何らかの学びたい思いを持って大学への入学を果たしたところと思う。ところが、学びの方法やプロセスが高校のときと違って、とまどったのではないだろうか。

例えば、教科書として提示された本は、高校の教科書とは、本の厚さや内容の緻密さが違っている。末尾には「参考文献」とされる文献名が多数掲載されているが、それらの本は近隣の書店で販売しているようなものではなさそうである。ときには外国語の文献が記載されている。

あるいは、「レポート」というものを書くように指示されて、何をどう書いていいのかわからなくて不安に陥ったのではないだろうか。授業時間も長くて、ただ緊張して聴いていけばよいというわけにもいかない。「講義」だけではなく、「演習」と称する授業があり、それは必ずしも教員が教えてくれるわけではなく、学生みずからが準備して報告することが中心になっている。卒業が近づいてからのことではあるが、卒業論文というものを執筆しなければならない。そのほか、高校のときとは違うことがたくさんあって、これからの4年間、適切に学びを深めていけるのか、心配になった人もいだろう。

なぜそういう違いがあるのか。高校までは、基礎学力の獲得のために必要なことが教科書にバランスよく掲載されていて、それを修得していくことが主な学習の方法であった。教科書に記述されていることは正しいということが前提であった。

そこで学ぶことには、私たちが人生を営んでいくうえで大切なことが網羅されている。「数学のこの公式を理解することに何の意味があるのか」「世界史のこの事象を知ることで役に立つのか」と疑問に思うこともあるが、いずれも長い人生を主体的に生きていくうえでは必要なことなのである。したがって、高校で学んだことは、大学で学ぶときにも大いに活用できる。

ただ、大学は高校の延長ではない。大学での学びは、新たな創造を目指す、「研究」という取り組みである。「研究」とは、これまでに誰も知らなかった新

たな知見をみずからが発見していくプロセスである。

おおげさな言い方をすれば、大学での学びを深めるということは、高校での勉強方法とは決別して、別の世界で生きていかなければならないことである。そして、4年間のなかで、何らかの自分だけの発見をすることが求められる。

そう言うと、「自分にはそんなことを達成する力はない」と考えてしまうかもしれない。しかし、心配する必要はない。研究のためには、すでに確立されたスキルがある。これを身につけることにより、誰もが研究や大学での学びを着実に進めていくことができる。大学での学ぶ領域は、文学、経済学、社会学、法学、理学、工学など多様である。高齢者介護のような身近な生活課題の分析もあれば、宇宙の成り立ちを解明するようなスケールの大きい活動もある。しかし、学問領域を超えておおむね共通する、いわゆるアカデミック・スキルズが確立されている。したがって、これらの基礎的なスキルを身につければ領域に関係なく、大学での学びを進めることができる。

高校で勉強が苦手だったという意識をもつ人は、大学での勉強に対してますます苦手意識が強くなってしまわないかと悲観的に考えているかもしれない。しかし、このスキルは実はそれほど難しいものではない。身につけさえすれば、きっと大きな成果をあげていくことができるに違いない。大学では、研究テーマを自分の関心に引き寄せて設定する。そこに確立されたスキルを活用していくのであるから、むしろ楽しい作業だといっても過言ではない。

逆に、スキルを知らないまま我流で進めていくとどうなるか。きっとどこかでうまくいかなくなって、挫折する日が来る。現代社会では、情報収集が容易になっており、大学で学ばなくても知識を修得できるようにも見える。しかし、スキルなしに情報だけ収集しても、雑多な事実がわかるだけで、体系的な学びにはならず、真実を見いだすことにならない。スキルを適切に獲得できるかどうか、4年間が充実したものになるかどうかを左右する。

本書ではそのスキルを具体的に、わかりやすく説明している。各章のタイトルは、そのスキルの一つである。まずは個々のスキルについて、どういうものなのか、なぜそれが必要なのかを理解してほしい。そしてすぐに使ってみてほしい。そうすれば、研究とはどういうことかも、わかってくる。

スキルは一見地味なものなので、スキル自体からすぐに何かが見つかるわけではない。そのため、修得する努力を重ねることに抵抗を感じるかもしれない。しかしその先には、学びが深まることによる楽しさが待っている。大学での学びは、知らなかった新たな世界が次々と見いだせるものであり、学べば学ぶほど、より楽しさも広がってくるのである。

また、スキルを身につけるには個人的な努力も欠かせないが、同時に教員と学生とのやり取りや、学生同士の学びあいも重要である。自分が適切にスキルを身につけつつあるのか、自分ではわかりにくい。教員による助言や学生同士のやりとりがあって、把握できるものである。

とりわけ、他の学生とのつながりや刺激が貴重なものになる。他の学生が、自分とは違う視点でものごとを捉えていることがある。自分が見過ごしていたことに着目して、自分にはない発想で分析しているのである。逆に自分が独自の発想をもって、他の学生に驚きをもたらしているかもしれない。こうして学びあうなかでお互いが成長していくのである。

研究というと、ノーベル賞を受賞するような、特殊で高度な能力をもった研究者が携わることというイメージがある。大部分の人は、専門の研究者を目指して大学に進学したのではない。一般企業や官公庁、あるいは病院や社会福祉団体のような社会サービス機関への就職を考えている人にとって、「私には関係ないこと」「私が研究の力を身につけたからといって、大学を卒業してから何か役に立つのか」と感じるであろう。

しかしこれから、社会のなかで生きていくためにこそ、研究をしっかりと進めることのできる力が求められるのである。どんな仕事であれ、何らかの問題があり、その問題を解決していくというプロセスをとる。例えば、販売業であれば、扱っている商品をできるだけ多く買ってもらう、という課題を達成していくことが仕事である。そのためには、商品に関連する情報を集め、多くの人の意見を集約して、分析していくという作業が欠かせない。それは研究の営みとほとんど同じといってよい。つまり、研究の力をもつことによって、社会のなかで直面する課題を解決することができるのである。

そうした個人レベルの活動にかかわることだけではない。一人ひとりが研究

の力をもつことは、社会を良くしていくことにもなる。現代社会は、必ずしも未来への明るい見通しがあるとはいえない。日本国内では、少子高齢化、人口減少、財政難、地方の衰退がすすんでいる。国際社会に目を向けると、さまざまな対立があって、戦争につながったケースさえある。地球環境の問題のように、人類の存続が危惧される課題さえある。

しかしながら、これらのことは対策が不可能というわけではない。何らかの対策を早めにすすめていくことで、解決・緩和することができる。ではどうすれば、解決・緩和していけるのか。そこでも、研究の視点でとらえることで、方向性が見いだせるであろう。実態をしっかり把握し、なぜそうした状況が生じたのかを考え、分析を重ねていくことで、解決への方策も見えてくる。

研究をすすめるときに、つらいこと、面倒なことがあるのは否めない。難しいような本や論文を読む、初めての人と会って話を聞く、統計資料を探してデータを整理するといったことは、努力を要するに違いない。レジャーを楽しむようなわけにはいかない。しかし、真理をみずから探究する喜びを知ったとき、多少の困難について乗り越えることができるであろう。そして、4年たったときに、大きく成長している自分に気がつくはずである。

2022年12月

著 者

よくわかる大学生のための研究スキル

---

## 目 次

はじめに ..... (杉山博昭) ..... i

**第1章 大学での学びとは何か** ..... (豊田尚吾) ..... 1

はじめに ..... 1

1 アカデミック・スキルズとは ..... 1

1-1 問いの発見 1

1-2 問いを発見するために 2

1-3 研究の基礎的技法としてのアカデミック・スキルズ 3

2 研究の開始 ..... 4

2-1 リサーチ・クエスチョンとは 4

2-2 研究テーマの設定 4

2-3 研究の基本的な手順 7

3 研究計画と必要な態度 ..... 9

3-1 研究の計画を立てる 9

3-2 研究過程における計画の見直し 11

3-3 研究が持つ公共性 11

おわりに ..... 12

**第2章 ノートの取り方** ..... (成清仁士) ..... 14

はじめに ..... 14

1 ノートを取る意味 ..... 14

1-1 大学の講義の特徴 14

1-2 講義を受けてノートを取る 15

1-3 問いを見つける 16

2 講義中のノートの取り方 ..... 16

2-1 大学におけるさまざまな講義 16

2-2 アウトラインを視覚化する 17

2-3 気づきを書き込む 19

3 ノートの取り方を上達させるために ..... 20

3-1 事前準備と心構え 20

3-2 ノートから次の学びへ 21

おわりに ..... 23

<b>第3章 情報収集の基礎</b> ……………(大東正虎) ……	24
はじめに……………	24
1 情報源とは……………	24
1-1 一次資料と二次資料	25
1-2 情報源の種類	26
1-3 情報源の特徴	27
2 図書館の利用……………	28
2-1 図書館の種類と特徴	29
2-2 OPACによる検索	30
2-3 書架のブラウジング	34
2-4 レファレンスカウンターの利用	34
2-5 図書館資料の入手	36
3 オープンデータの利用……………	37
3-1 官公庁の白書	37
3-2 官公庁の統計資料	37
3-3 その他の公的機関の資料	38
3-4 学術論文の検索と入手	39
おわりに……………	40
<b>第4章 統計資料の読み方</b> ……………(中井俊雄) ……	41
はじめに……………	41
1 統計資料とは……………	41
1-1 統計資料とは	41
1-2 代表的な統計資料	42
2 統計資料を読むときの留意点……………	45
2-1 統計資料の正確さについての判断	45
2-2 複数の統計資料を用いる	47
2-3 傾向値の見方	48
2-4 いつの時点のものか	49
3 統計資料の数値の判断……………	50
3-1 客観的な判断	50
3-2 数値を過信しない	51

3-3 代表値とデータの散らばり	51
4 統計資料に関して陥りやすい誤り	53
おわりに	54
<b>第5章 情報の整理</b> (濱崎絵梨)	55
はじめに	55
1 情報を整理する力	56
1-1 紙と情報機器の活用	56
1-2 書いて整理する	57
1-3 発想ノートのすすめ	57
2 研究と資料の整理	58
2-1 整理しながら読む	59
2-2 資料の情報を記録する	59
2-3 手がかりを残す	60
2-4 情報カードの活用	61
2-5 パソコンの活用	62
3 文献リストの作成	62
4 ブック・レポートの作成	63
おわりに	67
<b>第6章 読解～クリティカル・リーディングを学ぶ</b> (崎川 修)	68
はじめに	68
1 読むことと考えること	69
1-1 文献を読むということ	69
1-2 考えるとはどういうことか	70
1-3 考えるための読書～よき文献に出会うために	72
2 批判的読解(クリティカル・リーディング)の方法	77
2-1 批判的読解とは何か	77
2-2 論理構造を捉える	78
2-3 文脈(コンテクスト)を読み取る	80
おわりに	83

<b>第7章 レポートの書き方</b> .....(葉口英子) …	85
はじめに.....	85
1 レポートとは .....	85
1-1 文書の種類	85
1-2 レポートの種類	86
2 レポート作成のプロセス.....	87
2-1 ステップ1：テーマを決める	89
2-2 ステップ2：調べる	89
2-3 ステップ3：組み立てる	91
2-4 ステップ4：執筆する	93
2-5 ステップ5：点検する	93
3 レポートの文章表現・作法 .....	94
3-1 文章表現	94
3-2 パラグラフを意識する	96
3-3 正しく文章を書く	97
3-4 事実と意見を区別する	98
3-5 引用のルール	98
おわりに .....	100
付記：レポートの点検項目 .....	101
<b>第8章 プレゼンテーション</b> .....(中川敦子) …	102
はじめに .....	102
1 プレゼンテーションとは .....	102
1-1 プレゼンテーションの種類	103
1-2 プレゼンテーションの方法の確定	103
1-3 プレゼンテーションの一般的な流れ	105
2 プレゼンテーションのための事前準備 .....	106
2-1 発表原稿の作成	106
2-2 レジユメの作成	107
2-3 器具・設備の点検	107

3	プレゼンテーションに際して注意すべき点	107
3-1	プレゼンテーションの内容に関する注意	107
3-2	プレゼンテーションの技術に関する注意	109
4	レジюме	110
4-1	レジюмеとは	110
4-2	レジюмеの一般的な記載事項	111
4-3	レジюмеの実例	114
	おわりに	115
	付記：レジюмеの記載例【実例】	117

## 第9章 ディスカッション……………(深谷信介) … 119

	はじめに	119
1	ディスカッションとは	119
1-1	ディスカッションの定義と意義	119
1-2	ディスカッションの種類	122
1-3	ディスカッションの心構えと留意点	123
2	ディスカッションの手順	123
2-1	テーマ・目的・ゴールを決める	123
2-2	プロセス・役割を決める	124
2-3	サポートツールを活用する	125
2-4	進行する・まとめる	126
2-5	聞き手の重要性	129
2-6	ワールドカフェへのお誘い	130
3	ディベートとは……………	131
3-1	ディベートの目的・意義	132
3-2	ディスカッションとの差異	132
3-3	ディベートの基本的な構成要素	133
3-4	ディベートの効果と活用シーン	133
3-5	ディベートの心構えと留意点	134
	おわりに	135

<b>第10章 卒業論文に向けて</b> .....	(清水純一) ... 136
はじめに .....	136
1 卒論を書く意味 .....	136
2 卒論で大切なこと .....	137
3 卒論完成までのスケジュール .....	138
4 卒論完成までの自己管理 .....	138
5 指導教員との付き合い方 .....	139
6 文献解題 .....	141
おわりに .....	142
執筆者紹介 .....	144



# 第1章

## 大学での学びとは何か

### はじめに

本章では大学での学びに関する基礎的事項の確認を行う。まず「アカデミック・スキルズ」とは、大学で学ぶための基礎的技法を意味している。本書の構成にあるように、ノートを取り方から始まって、情報収集、読解方法……などの技術を学んでおくことは大学生にとって重要である。なぜならば、これらの技法を駆使し「研究」を行うことが学生の主たる目的の一つであるからだ。本章ではそのために必要な考え方とルールについて解説を行う。

まず、アカデミック・スキルズとは具体的に何を表し、それが研究活動に不可欠な「問いの発見」とどのように結びついているかを説明する。次に、研究に取り組む際には、テーマの設定とリサーチ・クエスションの明確化が重要だということを述べる。さらに、研究には「独自性」が必要であり、それがあるからこそ、その研究に価値が生ずるという点も強調したい。そして、本章の最後では、研究計画の策定と基本的なルールについて確認する。研究を有効に行うにはやはり計画が必要である。また研究活動を行うにあたって、その公共的な性質から守らなければならないルールもある。それらを踏まえたくうえで、大学における研究という未知の世界に羽ばたいてもらいたい。

## 1 アカデミック・スキルズとは

### 1-1 問いの発見

既述のように、アカデミック・スキルズとは大学で学ぶための基礎的技法の

ことである。では高校までの学びと大学での学びでは何が異なるのであろうか。大学は専門分野をより深く掘り下げて研究する場所といったイメージを持つであろうし、それは間違いではない。しかし、最も大きな違いは「自らが学ぶべき、あるいは研究すべき問いを発見し、それを追究する」ことにある。高校までは、あらかじめ問い、つまり解決すべき課題が与えられ、主としてそれを解くための方法や手段を学んできた。これに対して大学では高校までに培った力を基礎に、何が解決すべき問題なのかを自分で見つけようとする姿勢が求められる。

問いを発見するということはまだ解決されていない、答えがない課題を見つけることを意味する。もちろん、世の中には未解決の課題が山ほどある。そうであるならば探さなくてもいくらでもあるのではないかと思うかもしれない。しかし、それは世の中の誰も解決できていないから問いとして残っている難題であって、それに準備なしでチャレンジするのは無謀である（後述の「大きすぎる課題」）。現在の自分の能力を的確に評価して、身の丈に合った問いを発見するのは簡単ではない。先人の多くが自分の問いを見つけるのに苦労しているのが実際のところなのである。

つまり問いを発見するということは、自分の力で解決できる可能性のある課題を見つけ、その背景にある真理を明らかにしようとする行為である。そのためには高校までの基礎知識はもちろん、理解力、思考力、洞察力、直観力、持久力などが必要になる。

## 1-2 問いを発見するために

では、いかに問いを発見すればよいのか。問いとは「疑問」であるから、「なぜ、どうして」という理由に対する関心が身近であろう。なぜこんなにきれいな青色に光るのだろうか、どうしてこんなに繁盛しているのだろうかなど、生活の中でなぜと感じる機会が多いのではないだろうか。それは問いの発見につながる感覚である。他にも「どうしたら」人間関係を改善できるのだろうか、「何が」事故の原因なのだろうかといった、いわゆる5W1Hは貴重なきっかけを作ってくれる。